

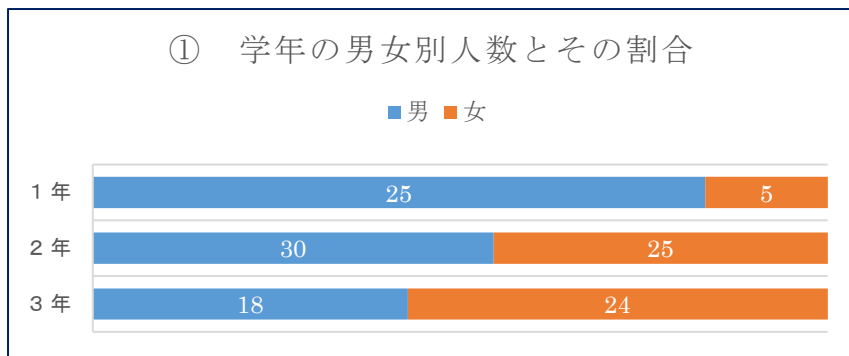
「わたしが、かしこくお医者さんに診てもらおう力を育てる」アンケート調査  
秋田県A市内小学校「低学年」の調査結果について（2016年5月末～6月初実施）

北海道家庭医療学センター「診られる力を育てる」プロジェクト

1 はじめに

秋田県A市の市内2校の小学校の協力を得て、2016年5月末から6月初めにかけて調査を実施した。

B校は6学級以下の学校規模、1年男



8・女2で計10名、2年男9・女8で計17名、3年男10・女10で計20名、合計男27・女20で計47名。

C校は12学級以下の学校規模、1年男17・女3で計20名、2年男21・女17で計38名、3年男8・女14で計22名、合計男46・女33で計80名。

総計127名（男73名57.5%、女54名42.5%）の協力を得た。

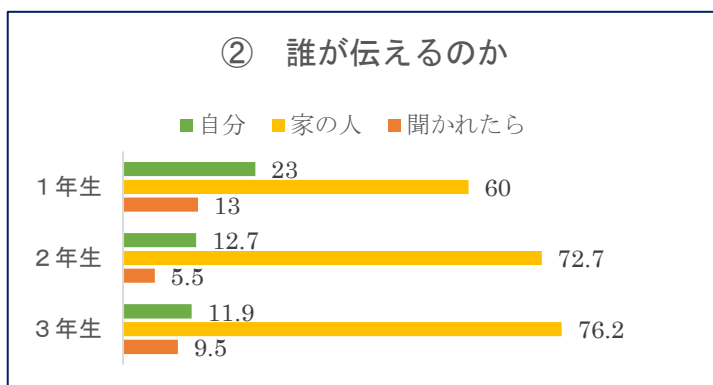
学年別では、1年生男25・女5の計30名（調査全体総数の23.6%）。2年生男30・女25の計55名（43.3%）、3年生は男18・女24の計42名（33%）である。

全体的には約6割が男子で4割が女子であった。また、学年の人数、男女差がある。

アンケート調査は、すべて質問に対し回答を複数の項目から選択する方式である。分析は、基本的に学年別・男女別で行うが、1年生のように女子が極端に5名しかいない場合は、学年でその傾向を調べてみた。割合の数値は、少数点以下2位の位を四捨五入する。

2 質問1 誰が伝えるのか

お医者さんに誰が症状を伝えるのかという質問に対して、1年生は「自分から」は7名（23%）、「おうちの人」18名（60%）、「お医者さんに聞かれたら自分で答える」4名（13%）、不明1名であった。



2年生は、「自分から」男6名・女3名、計9名（12.7%）、「おうちの人」男23名・

女17名、計40名(72.7%)、「お医者さんに聞かれたら自分で答える」男0名、女3名計3名(5.5%)、不明男1名・女2名であった。

3年生は、「自分で」男2名・女3名、計5名(11.9%)、「おうちの人」男15名・女17名、計32名(76.2%)、「お医者さんに聞かれたら自分で答える」男1名、女3名計4名(9.5%)、未記入女1名であった。

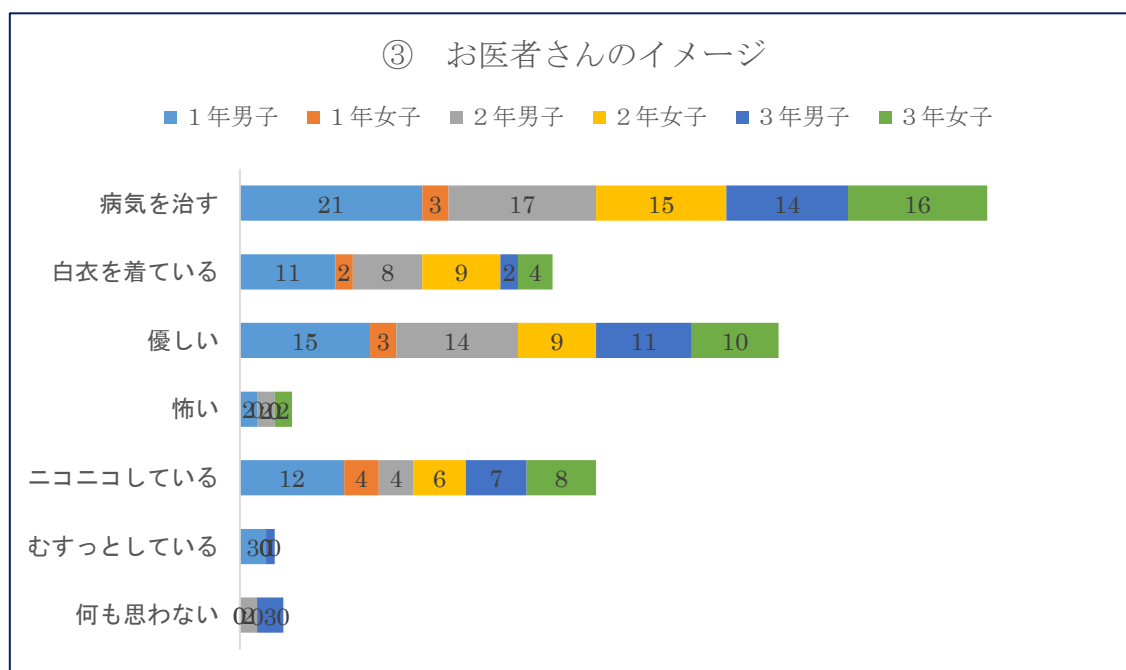
ここで学年が上になるほど、自分では答えず、「家の人(保護者)」に答えてもらう割合が増える傾向が見える。2年生72.7%のうち、男子が76.7%、女子が68%、と男子が3.3ポイント高いだけであるが、3年生の場合、男子が83.3%と8割以上が「家の人」に答えてもらっている実態が明らかになった。特に女子70.8%も1年生の60%に比べると高い数値であるが、同学年の3年男子とは12.5ポイントも差があることから、男子の依存度の高さが指摘されよう。

全体的には、「家の人」が70.9%、「自分から」が16.5%、「聞かれれば答える」が8.7%であった。

自分で、あるいは医師の質問があれば答えるという割合が、1年生は36%であるが、2、3年生は20%前後と低くなる傾向は、学年の発達により自然に身につくものではない。受診するという状況の中で、教育的な指導があってはじめて身に付くものであると考えられる。よって、そこに、医師としての教育的配慮が求められる場面が生まれる。家庭教育にも配慮した医師の指導が問われると考えるがいかがだろうか。

### 3 問2 お医者さんのイメージ

どのようなイメージを持っているのかを7項目示して、あてはまるものをすべて選んでもらった。

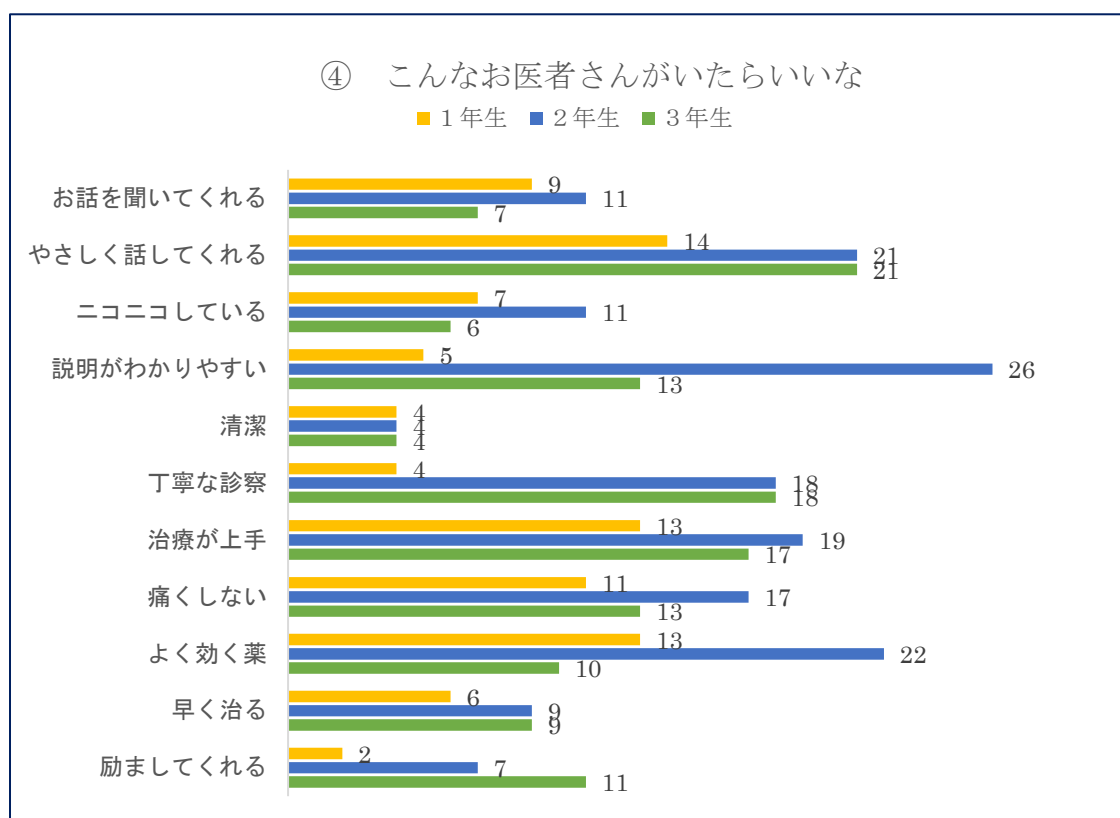


全体的には、「病気を治してくれる人」86人（67.7%）が半数を超えただけで、以下の項目は5割にも満たなかった。「優しい」62人（48.8%）、「ニコニコしている」41人（32.3%）、「白衣（お医者さんの服）を着ている人」36人（28.3%）で、「怖い」6人（4.7%）、「むすっとしている」4人（3.1%）、「何も思わない」5人（3.9%）であった。「怖い」「むすっとしている」といったマイナスのイメージが少ないことは、医師にとっても子どもにとって幸いであるが、それでもそういう思いをしたことがあるからこそ、それを選択したのであろう。幼少期のマイナスのイメージをこれから払拭するには、以下、次のような医師が求められることになるであろう。

#### 4 問3 こんなお医者さんがいたらいいな

11項目から思うものを3つ選択するという設問である。

まず全体的な傾向から見ていきたい。回答が分散しているところから、学年別にも焦点を当てる。



「やさしく話してくれる」56人（44.1%）、「治療が上手」49人（32.3%）、よく効く薬をくれる」45人（35.4%）、「説明がわかりやすい」44人（34.6%）、「痛くない・痛いことをしない」41人（32.3%）、「ていねいに診察してくれる」40人（31.5%）が30%以上である。

「お話を聞いてくれる」27人（21.3%）から10%台が「ニコニコしている」「早く治る」が24人（18.9%）、「励ましてくれたり元気がでたりすることを言ってくれる」

が20人(15.7%)で、「清潔」が12人(9.4%)で最も低かった。

次に、男女による大きな差異は見られないので、学年別のベスト3を出しながら分析する。

「やさしく話してくれる」が1年生14人(46.7%)、3年生21人(50%)で最も多く、2年生は21人(38.1%)と3番目であった。3年生は「説明がわかりやすい」26人(47.3%)がトップで、「よく効く薬をくれる」が22人(40%)で、1年生は「治療が上手」13人(43.3%)とともに2番目に選んでいる。「治療が上手」は3年生では、17人(40.5%)と3番目であった。3年生の2番目は「説明がわかりやすい」18名(42.9%)であった。また、「励ましてくれたり元気がでたりすると言ってくれる」が他の学年に比べて26.2%と4人に一人が選んでいた。

## 5 分析を終えて

低学年で共通するのは「やさしく話してくれる」お医者さんである。優しいというイメージをどのように幼少期から育てていくのかが重要である。乳幼児の検診や予防注射接種、歯科医の治療など、「痛くされる」ことへの心理的な抵抗感は、このような接し方を繰り返すことで解消していくのではないだろうか。

また、「お話を聞いてくれる」という点では、決して保護者への依存ではなく、医師の話の聞き方にも問題があるのではないか。どのように問診するのかによって子どもの「診られる力」は向上するものとする。親に対しても、当然本人の意思を尊重するといった診察に臨む態度を求めることも必要不可欠である。

また、学年の発達ともに「説明がわかりやすい」や「丁寧な診察」「治療が上手」など、しっかりと医師を評価しているところも見逃せない。どのような症状であるかを知らせ、それを治療したり改善したりするのはどうするのかという「治療の方法や態度」をわかりやすく説明する。そこではじめて、子どもは自分の今の症状を把握することになる。自分の身体や病気について、その子の理解度に配慮しながら、医師や家族と共に治療にあたる術を伝えることが、互いの信頼関係を築いていくことになると考える。

そして、薬の服用や生活態度などを自己管理しながら、治癒にあたるという態度形成がなされていくものとする。その中で、3年生が指摘している「励ましや元気を与えてくれる」医師の存在は大きい。小さい子は、言葉がけによって、その人との関係を見極めていく力を育てていく。それが、「診られる力」を子ども自身の内に育む一助となる。